

学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【20】

— 授業分析に必要な教育資料の構成と総合化 —

The development study of the many viewpoints picture teaching materials
which accepted the purpose of the learner

長慶寺香*¹ / 阿部彩野*² / 齋藤陽子*³ / 久世均*⁴

授業分析をはじめとする授業改善への取り組みである授業研究を行うことにより、教師の「暗黙知」の獲得が促進され、実践的な授業力の向上へとつながる。その認識を広げるため、また後世へ伝えるために、現代における優れた授業の授業アーカイブを行う。授業アーカイブとは、授業の関連教育資料を総合的に収集・管理・保管することである。そして、教員を目指す学生を対象とし、授業アーカイブされた多視点映像による授業分析の実践から、授業研究のための教材を開発研究した。ここでは、多視点同時撮影した日本と英国それぞれの授業を多視点映像として教材化し、それらを定量分析することによる実践的な教員養成での活用効果について報告する。

<キーワード> 授業分析, デジタル・アーカイブ, 教育実践資料, 授業アーカイブ

1. はじめに

教師を目指す学生にとって、教員の専門性の中核である「実践的指導力」を身につけておくことは重要である。教員に求められる実践的な指導力は、具体的に「子ども理解力」、「集団指導の力」、「学習指導の力」など、多くの側面から考えられる。本研究では、この実践的な指導力について「授業力」に着目した。なぜ「授業力」なのか。学習指導要領に示された教育のねらいである「生きる力」を育成するためには、教科の授業を中心にして、知の側面である「確かな学力」の定着を図ることが求められている。従って、学校生活の大半を占める授業を中心にして、子ども達の「確かな学力」を育むことが大切になるからである。

そして「確かな学力」を育むためには、授業を行う教師自身の授業力の向上が不可欠であり、授業力の向上には、自らの授業を振り返り、課題を明らかにし、授業改善に努めることが必要である。そこで授業分析が重要な役割を果たす。

本研究では、授業研究の記録を何十年、何百年後の授業研究にも活用していくため、多視点で撮影した授業の映像を基に、様々な授業分析を行い、実際に授業をデジタル・アーカイブし、長期保存を考えた授業アーカイブにおける関連教育資料の構成と総合化について研究した。

2. 授業アーカイブのための関連教育資料

授業アーカイブでは、その授業の背景や授業の様子を記録するための関連教育資料の整備が重要である。

そこで、授業アーカイブのための関連教育資料の構成を改善のためのマネジメントサイクルである、PDCAサイクルで考えた。

計画（P）段階では、授業を行うためにシラバスに基づき、授業の構想（学習指導案）や板書計画などが必要となる。実施（D）段階では、授業を実施し、授業分析のための資料を収集する。授業は一過性の面があり、一見しただけでは捉えにくいため、文字化された記録だけでなく、メディアによる記録も収集し、分析の際に授業の事実をはっきりと捉えられるようにする。次の評価（C）段階で、授業分析が行われる。収集した授業記録に基づき、一つひとつの事実の持つ意味を明らかにすることを通して、授業における課題を明らかにし、授業改善と授業を行うための力量の向上を図る。従って、授業分析は授業研究において大切な位置を占める。最後に、改善（A）段階では、成果と課題に基づいて具体的な改善策を考える。授業アーカイブにおいても、このような管理システムの一つであるPDCAサイクルを基本に、教育資料の構成することが必要である。

3. 関連教育資料の構成

授業分析は、授業という事実に基づいて行われるため、授業を振り返ることができる客観的な資料を収集しておく必要がある。授業分析のための基礎資料としては次のものがある。

(1) 授業者による授業評価記録

図1のように分析しようとする授業について、あらかじめ設定した観点に基づき授業者自身が評価を行うものである。

【授業者用】 **授業評価シート**

実施日：平成 年 月 日 ()

授業者： 年 組 担任

教科： 学習単元 (題材)：「 」

くわらい、指導上の留意点

4 (その通り) →3 (ややその通り) →2 (あまりその通り) →1 (思わない)

項目	No.	評価項目	評価状況	No.
授業の準備・教材の工夫	1	児童の理解度に応じた教材 (資料・プリント) を工夫した。	4 3 2 1	1
	2	予想される反応を考え、それに対応した手だてを準備した。	4 3 2 1	2
授業の充実	3	基礎的な知識・技能の確実な定着が図れる学習活動を展開した。	4 3 2 1	3
	4	児童の学習意欲を喚起する学習活動を展開した。	4 3 2 1	4
授業の進め方	5	授業の最初に、本時のねらいを示し、授業の最後に本時の内容を確認した。	4 3 2 1	5
	6	学習活動を把握し、理解度に応じた授業の進め方ができた。	4 3 2 1	6
	7	児童の発言や発表など、児童自ら考えた内容を取り上げた授業ができた。	4 3 2 1	7
児童主体の授業の工夫	8	児童一人ひとりが積極的に授業に参加できる場面が用意できた。	4 3 2 1	8
	9	自ら考えたり、自ら取り組んだりする主体的な学習活動の場を設けた。	4 3 2 1	9
説明の分かりやすさ	10	児童の理解度に応じた説明や指示をした。	4 3 2 1	10
	11	簡明なポイントを押さえた説明をした。	4 3 2 1	11
	12	学習の進め方や関連、ポイントがよく分かるようにした。	4 3 2 1	12
児童への接し方	13	良い点をほめるなど、学習意欲の向上につながる対応に取組んだ。	4 3 2 1	13
	14	机間指導で一人ひとりの学習状況の把握に努めるとともに、支援に取組んだ。	4 3 2 1	14
児童の学習状況	15	児童は内容を理解しようと取り組んでいた。	4 3 2 1	15
	16	児童は自分自身で考えるようにしていた。	4 3 2 1	16
17	児童の取り組みの様子から、内容をおおむね理解したと捉えられる。	4 3 2 1	17	

<自由記述> 授業の良かった点や改善が望まれる点について

図1 授業評価シート

(2) 授業評価記録

授業者自身の自己評価と同様に、観点などに基づいて、児童や授業参観者から評価を受ける授業評価記録を取ることが必要となる。

(3) 多視点授業映像記録

HDビデオを使って授業を記録するものである。音声とともに教師や児童の様子を映像で再現できるところに音声記録との明らかな違いがある。特に、本学では、デジタル・アーカイブ手法を活用した多視点授業映像記録を行っている。

従来の単視点のみの撮影による映像記録では、授業中の教師と学習者双方の様子を全体的に見ることは難しい。撮影者の意図が反映され、多様な視点を必要とする授業分析においては、不十分な点も多い。また、実際に授業の現場で観察を行った場合と比べると、臨場感に欠け、視野も狭いため、限られた対象しか分析できない。また、授業展開において確かめたい部分があるときに、その対象の映像が記録されていない

場合も多くある。そのため、複数のビデオカメラを設置してより多くの角度から映像を記録しておく必要性が生じる。図2のような多視点映像記録は、より広い視野による観察・分析を可能にすると考えられる。

そこで本研究では、5つの視点による多視点同時撮影で映像記録を行った。教室の四隅に各1台ずつ設置し、主に児童の姿を記録するカメラ (固定) と教師を追うカメラの計5台のカメラを設置した。授業においては教授者と学習者の関係が重要であり、授業分析を行うには、教師と児童の様子をどちらも網羅的に記録できる、この5つの視点が最低限必要になると考えたためである。教師を追うカメラによる映像は、教師がどんな意図で授業を行い、どんな表情で子どもと接していたのか、捉える資料となるため重要である。



図2 多視点授業映像記録

(4) 授業者インタビュー

授業を撮影した後に、授業担当者と授業を参観した学生によるインタビューを行い(オーラル・ヒストリー)その様子を撮影する。

インタビュー実施には、授業で何が起こったのか理解を深めることや授業に関する様々な見方・考え方を交流し深めることなどの目的があり、授業に対してより深い理解を得ることができる。ただし、教師が授業中の各場面では何を考えていたか正確に記憶しているとは考えにくく、インタビュー内容が必ずしも授業中の教師の思考を正確に反映しているわけではない、という問題点もある。それでも教師の思考については本人に尋ねる以外になく、インタビューを実施し、授業中の教師の態度との整合性を検討するなどして、教師の授業デザインの思考を明らかにしていくことが重要となる。

(5) 参観者による観察記録

授業を参観するときに、見聞きしながら直に記録するものである。あらかじめ作成されている用紙に記録する。授業全体の雰囲気や授業者

の問いかけに対する児童の表情などの非言語活動などの記録から、多視点映像記録だけでは捉えきれないことを捉えることができる。

4. 授業分析資料の構成

授業分析は、教科や学年などのグループまたは学校全体で取り組むことが多いが、参観者の経験則にしたがって授業を参観、分析するだけではよりよい授業分析にはならない。特に、授業経験のない学生が、より客観的な授業分析を行うためには、資料に基づいた授業の分析が大切になる。

資料に基づく授業分析を行うためには、学習指導案、授業評価記録の結果など文字化された資料が重要になると共に、授業者や学習者の非言語活動（文字化された資料では読み取ることができない活動）を読み取るために、授業中の授業者や学習者の様子を収録したビデオ記録を、併用しながら分析に臨むことが重要である。

授業分析は、分析の仕方によって、量的分析と質的分析の二つに分けることができる。

(1) 量的な分析

量的分析とは、教授活動や学習活動をいくつかのカテゴリーに分類し、それらのカテゴリーの出現頻度を分析するものである。量的分析では、あらかじめ設定された分析の「ねらい」を基に授業中の事象を分類することから、授業改善に向け客観的な示唆を得ることができ、授業の全体像をつかむことができる。

- ・ 授業者、学習者の行動項目を設定し、それを数量化（項目別の出現頻度・割合など）する。
- ・ 持続時間、頻度、度数に焦点を当てる。
- ・ 集団全体を焦点化する。
- ・ 統計量に基づくものである。

(2) 質的な分析

質的分析では、授業者と学習者の発言や動作などの記述や記録に基づいて分析が行われる。このことにより、授業改善へ向けて、より実際的な示唆を得ることができる。

- ・ 授業事象・現象をありのまま記述・描写し、教師の意図や指導の手立てを比較する。
- ・ 発言内容、活動内容のカテゴリー化や順序性に焦点を当てる。
- ・ 個人を焦点化する。
- ・ 記述や記録に基づくものである。

5. 授業分析手法

分析方法として、小学校6年「道徳」の授業分析をしたものを用いて、以下に量的分析の例を挙げる。

量的分析では、いずれの分析方法を行うにあたって、教師と学習者の言動を対象に分析を行っていくため、「逐次発言記録」が必要になる。参観しながら記録（速記録）していくことは経験が問われるため、映像を基にして取った逐次発言記録があらゆる分析方法において重要な資料になる。

(1) 教師と児童の行動分析

評価対象となる場面をあらかじめ設定し、授業観察やビデオの視聴から、それらの場面の出現状況の頻度を一定時間（本例示では5秒間）ごとに区切って、時間の経過ごとにチェックシートに記入して分析するものである。

<分析方法の特徴>

- ・ 観察した授業において、教師の活動と生徒の活動にどのような場面が多く見られたか、または見られなかったのかを客観的に見ることができる。
- ・ 授業の経過時間に伴って、それぞれの活動場面がどのように推移していくのか見ることができる。

行動分析		教師の活動							児童の活動				
場面 経過時間	教師の活動							児童の活動					
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	
	説明場面	指示場面	確認場面	発問場面	板書場面	支援場面	その他の場面	思考場面	発表場面	発問への応答場面	自主的な質問場面	その他の場面	
0	0											1	
5			1									1	
10				1								1	
15				1								1	
20	1											1	
25						1						1	
30						1						1	
35						1						1	
40			1									1	
45	1											1	
50				1								1	

図3 行動分析

(2) S-T授業分析

S-T授業分析は、授業中に出現する児童〔S〕の行動（言語活動、非言語活動）と教師〔T〕の行動（言語活動、非言語活動）の二つのカテゴリーだけに限定して、図4のように授業中の児童と教師との行動関係がどのように現れているかを分析するものである。

<分析方法の特徴>

- ・ 児童〔S〕、教師〔T〕それぞれの主体となった行動を累積した折れ線グラフで表す。
- ・ 授業の主体を数値化することにより、授業のパターンを見出せる。（図4のグラフは、教

師の働きかけによる児童主体の授業であったという特徴を証明している.)

ST分析										
0	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	0:30	1:00	1:30	2:00	2:30	3:00	3:30	4:00	4:30	5:00
	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
1	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	9:00	9:30	10:00
	T	T	T	S	S	S	S	S	S	S
2	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00
	S	S	S	S	T	S	S	S	S	S

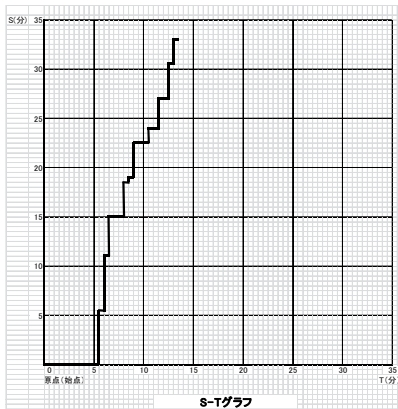


図4 S-T分析

(3) コミュニケーション分析

フランダースの授業分析といわれる量的分析の代表的なもので、1970年代にフランダース(Flanders)によって考案された、言語活動の分析法である。授業の流れを5秒ごとに区切り、先の発言と後の発言を表の分析カテゴリーで分類して授業の雰囲気をつまやかにするものである。

<分析方法の特徴>

- ・授業中の生徒と教師との言語活動関係がどのように現れているかが分かる。
- ・分析はマトリックス表を見て、頻度の高い項目に着目して解釈を加えたり、教師の発言率や生徒の発言率から解釈を加えたりする。

コミュニケーション分析		時間									
発言者	発言内容	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		0:30	1:00	1:30	2:00	2:30	3:00	3:30	4:00	4:30	5:00
教師	授業の導入	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
生徒	授業の導入	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
教師	授業の展開	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
生徒	授業の展開	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
教師	授業のまとめ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
生徒	授業のまとめ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

図5 マトリックス表

(4) ジェスチャーの表出からみた分析

非言語的行動(ノンバーバル)とは、言葉に付随して、あるいは言葉に先立って表出される身体の動きによるメッセージである。図6のように非言語活動の一つであるジェスチャーの表出を調べることで、授業におけるジェスチャーの効果进行分析するものである。

<分析方法の特徴>

- ・授業の中で教師がどんなジェスチャーを示しているのか調査することができる。

ジェスチャー動作のカテゴリー		5	10	15	20	25	30	35	40	45	総数	%
強動作	人や物の動きや形を模倣する	#	/			/			/			
示動作	眼前にある物あるいは人を指す	2	1			1			1		1	6
運動動作	人や物のようすを表す		#	#	#	#	#	#	#	#	1	15.3
字動作	数を示したり、数えたりする											
調動作	語句や文節を強めたり、聞き手に同意や確認を求めたりする					/	/	/	/	/		
演・資料	実物・資料の提示やそれらを使った説明をする				1	1					2	2.0
板説明	板書の一部を指し示す	#	#	#	#	#	#	#	#	#	1	8
1意動作	児童の意見に同意する動作	3			2	1	1				1	8.1
1考動作	教師の考えている動作	7			2	3	1				1	14.2
その他の動作		#	#	#	#	#	#	#	#	#	1	14
数		4	6	6	7	6	3	5	2	3	4	2
		/	/	/	/	/	/	/	/	/		
			1	2		1	2	1		2	9	9.1
		/			/							
		1			1						2	2.0
		12	6	9	13	16	12	10	9	2	9	98
		12.2	6.1	9.1	13.2	16.3	12.2	10.2	9.1	2.0	9.1	

図6 ジェスチャー分析

(5) 授業関連資料

この他、学生が授業分析を行うための教材として、または長期保存の授業記録として、次のようなものが考えられる。授業アーカイブでは、これらの教育資料を総合的に収集・管理することが必要である。

- ・指導案、教材観、児童観、本時の目標、本時の展開、評価規準、板書計画
- ・使用した教材(資料)
- ・ノートやワークなど児童生徒の記述したもの
- ・本時のもの、(前時までのもの)等

6. 授業アーカイブの具体例

今回、授業分析をした学校は、英国のロンドン郊外に位置する“Stockwell Park High school”である。この学校は11歳から16歳の年齢の児童・生徒が約1,000人が通っている。

児童・生徒の出身国は様々であり、多様な言語を母国語としている。このような多民族、多文化の子ども達が通う学校の授業を多視点授業映像で記録し、コミュニケーション分析をした。撮影した「ドラマ」という授業は、イギリスの中学・高校(11~18歳)で行われており、身体表現(ドラマ)を通して、国語・社会・歴史・

数学など様々な教科と連動しながら行われている。図8のように活動原簿表に逐次発言記録を取り、授業の流れを5秒ごとに区切って、先の発言と後の発言を、設定した図9のような分析カテゴリーで分類し、授業分析を行った。



図7 英国の授業

活動原簿表

教材 drama

2010年 2月 26日

時	分	T(先生)	S(児童)	行動記録メモ T	行動記録メモ S
0	0	1		Focus on the coin. Anybody can start now.	コインを渡して、誰が始めてもいいですよ、はい。
3	7c				One Two Three 一 二 三
10	7c				Four Five 四 五
19	7c				Six Seven Eight Nine 六 七 八 九
20	7c				Ten Eleven Twelve Thirteen 十 十一 十二 十三
25	7c			AAAAHH Good.	ああー！ いいでしょう。 十四 十五 あー！
30	5c			That was good. Clap your hands. Come on. (clap) Very good. So fifteen.	良かったですよ。 拍手して。 まあ、拍手) よく出来ました。 十五ですよ。
35	1			I'll take fifteen. I'm going to add one thing else, now, to that.	十五ならいいでしょう。 今からこれにもう一つルールを加えますよ。
40	1			If Karis says a number, and then, you are not able to say one, neither is Melissa.	カリスが数を言った場合、倍数のあるなら、カリスはダメ、メリッサも言うことができません。
45	3			So, it's got to go across all the time. Yes?	つまり、常に向かい向かいの人に行かなくてはなりません。いいですか？
50	5c			Because, if, if somebody besides you says, and then you have to go. But, fifteen is good.	つまり、誰かが言った場合は、それお話しください。でも、十五はいいですね。
55	2			It means that we've got four goes and we want to hold it up. All eyes on the coin... One!	あと4回チャンスがあります。この牌子でやりましょう。みんな、コインを見て... 一！

図8 授業分析のための活動原簿表

カテゴリー・システム					
自発	会話	始教師の	1 提示		
			2 指示		
			3 せまい質問		
			4 広い質問		
応答	教師の反応	教師の反応	5 受容	5a アイデア	
				5b 行動	
				5c 感情	
				5d 視聴	
			6 拒否	6a アイデア	
				6b 行動	
	6c 感情				
応答	児童の反応	児童の反応	7 反応	7a 対 教師	予測可能
				7b 対 児童	予測不能
			8 活動	7c 対 児童	
				7d 感情	
			9 視聴	8a 個人	
				8b グループ	
10 拒否	9a 対 教師				
	9b 対 児童				
11 発言	10a 対 教師				
	10b 対 児童				
その他			11a 対 個		
			11b 対 全体		
			12 沈黙		
			Z 無関係		

図9 カテゴリー・システム

データの行数 / 先の発言	後の発言														Z	Z	総計										
先の発言	1	2	3	4	5a	5b	5c	5d	6a	6b	6c	7a	7b	7c				8a	8b	9a	9b	10a	10b	11a	11b	12	
1	57	21	5	3																					1	105	
2	13	23	8	2	1	1	13								13	12									1	89	
3	6	2	8				1	5																		39	
4				1											2	7	1										12
5a					1	1																			3	5	
5b					1	2	1		1	1	2															9	
5c					11	19	3	2			2	8				1	4								3	62	
5d					1	2	1					1				2										9	
6a					1																					3	
6b																										1	
6c																										3	
7a					3	2	3	1				1	6													20	
7b					1	3	1		1	1	3	2				3	1								1	47	
7c					2	2	3	1																		13	
8a																										0	
8b					9	8	2				1	8													1	258	
9a																										0	
9b																										0	
10a																										0	
10b																										0	
11a					4				1	1	1	1														8	
11b																										0	
12																									1	1	
Z																										0	
総計	104	89	39	12	5	9	63	9	3	1	3	20	17	43	0	258	0	0	0	0	8	0	1	0	684		

図10 授業分析結果

領域の説明 (VICS)

データの行数 / 先の発言	後の発言														Z	Z	総計									
先の発言	1	2	3	4	5a	5b	5c	5d	6a	6b	6c	7a	7b	7c				8a	8b	9a	9b	10a	10b	11a	11b	12
1																										105
2																										89
3																										39
4																										12
5a																										5
5b																										9
5c																										62
5d																										9
6a																										3
6b																										1
6c																										3
7a																										20
7b																										47
7c																										13
8a																										0
8b																										258
9a																										0
9b																										0
10a																										0
10b																										0
11a																										8
11b																										0
12																										1
Z																										0
総計	104	89	39	12	5	9	63	9	3	1	3	20	17	43	0	258	0	0	0	0	8	0	1	0	684	

図11 授業分析における領域の抽出

図10の分析結果を、図11と図12の領域と領域の説明に当てはめると次のことが分かる。

- ・ Nの領域である児童・生徒の活動が、229ポイントと、非常に多いことから、本授業の多くが児童・生徒の自主的な活動であったと分かる。
- ・ Dの領域は、これらのNの活動が教師の指示により主体的に行われていることが分かる。
- ・ Cの領域で、児童・生徒も、自主的な発言をしていることが読み取れる。

領域の説明
A 情報や意見の提示、指示、質問など教師のはじめの発言。教師が長い間はなし続けていることが特徴。教師と生徒間の相互作用を示す領域ではない。
B 教師のはじめの発言に受容が拒否に入る。教師の応答としての発言が続いていることを意味している。
C 教師のはじめの会話に続く生徒の会話すべての会話が含まれる。
D 教師の応答としての発言に続いて、教師のはじめの発言がなされている。
E 教師の受容行動の継続を示す。アイデア、行動、感情の広範な受容と、これらの言語的なパターンのいずれから他のパターンへの移行も含まれる。
F 教師の受容行動に続いて、教師の拒否行動が生じている。
G 教師の受容的発言に続く生徒の発言を示す。
H 教師の拒否行動に続いて、教師の受容行動が生じている。
I 教師の側の広範囲にわたる拒否行動が含まれる。アイデア、行動、感情の拒否と、これらの行動のいずれから他のパターンへの移行も含まれる。
J 教師の拒否的な発言に続く生徒の発言すべてが含まれる。
K 生徒の応答行動に続いて、教師のはじめの行動を指す。
L 生徒の応答に、教師の受容が続いている。
M 生徒の応答を教師が拒否している。
N 教師、あるいは他の生徒に対する生徒の広範な応答、または活動を指す。
O 生徒の応答発言に生徒のはじめの発言が続いている。
P 生徒のはじめの行動に教師のはじめの行動が続いている。
Q 生徒のはじめの会話に続いて、教師の受容がなされる。
R 生徒のはじめの会話に対する教師の拒否を示す。
S 生徒のはじめの発言に続いて、生徒の応答としての発言がなされている。
T 教師あるいは他の生徒に向けての生徒のはじめの発言が含まれる。
U 沈黙か混乱を表す領域。

図12 領域の説明

つまり、総合的に今回の授業の特徴をみると、教師の指示により児童・生徒が積極的に発言し、自主的に活動している授業であることが分かる。実際、本授業は、教師の指示により、自主的に活動している授業であったことから、これらの分析結果には頷ける。

また、外国の授業をアーカイブする場合は特に、教育制度や教育の動向などの情報を収集・整理しておくことが重要である。社会情勢等を踏まえ、日本の教育と共通する点、異なる点を把握しておかなければ、本当に外国の教育から学ぶことはできない。諸外国の授業を見学し単にその国の教育を学ぶだけでなく、そのような視点をもって授業アーカイブに臨むことで、諸外国だけでなく日本の教育の特徴や良さをも再確認できる。

諸外国での授業撮影、授業分析を通して、我が国の授業の特質や諸外国の授業との差異を分析するという経験をすることで、授業を見る視野を広げることができる。このことから、教員としての実践的な力量を付けるためには、諸外国の教育から学ぶことは必要なことであると考える。

7. おわりに

本研究では、授業を多視点でデジタル・アーカイブし、長期保存を考えた授業アーカイブにおける関連教育資料の構成について報告した。授業アーカイブとは、単に、授業のビデオを撮影記録することではなく、これらの関連教育資料を総合的に収集・管理・保管することである。

また、今回実践した授業アーカイブについてまとめ、ワークシートを作成し、教員養成段階の学生が教材として活用できるようにした。授業分析を踏まえた授業改善の取り組みは、教員養成の段階として行うことは勿論であるが、大学としても授業アーカイブを組織的に行い、授業分析の課題や成果を共有することが重要である。今後、様々な授業をアーカイブし、教員養成を行う方法を研究する予定である。

尚、本研究において久世均教授、齋藤陽子講師にご指導いただいた。厚く感謝の意を表します。本研究は文部科学省の科学研究費補助金基礎研究(B) (課題研究番号 20300278) を受けて進めていることを、感謝をもってここに付記する。

参考資料

- 1) 久世・齋藤・松本・川田：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【V】
—実践的な教師力を養成するための教材研究—
(2009.7)
- 2) 市川・丸山・齋藤・松本・久世：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【X】—授業研究のための多視点映像教材の開発— (2009.11)
- 3) 市川・丸山・齋藤・松本・久世：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【14】—授業研究のための映像教材の研究— (2010.2)
- 4) 齋藤・久世・長慶寺・阿部・松井・二ノ宮・水端：我が国と諸外国における授業のビデオ分析と教員養成への活用効果に関する研究【I】～英国の授業デザイン分析手法の開発～ (2010.7)
- 5) 長慶寺・阿部・松井・二ノ宮・水端・齋藤・久世：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【16】—授業分析に必要な教育資料の構成と総合化— (2010.11)
- 6) 阿部・長慶寺・松井・二ノ宮・水端・齋藤・久世：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【17】—多視点映像教材の流通と授業への活用— (2010.11)